

令和4年3月31日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 三重県津市広明町13番地
管理機関名 三重県教育委員会
代表者名 教育長 木平 芳定

令和3年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業に係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

令和3年 4月1日(契約締結日)～ 令和4年 3月31日

2 指定校名・類型

学校名 三重県立飯南高等学校
学校長名 土方 清裕
類型 地域魅力化型

3 研究開発名

「チームいいなん」の挑戦 ～未来を切り拓く“地域に根ざした人材”育成～

4 研究開発概要

本事業では、地域が抱えている諸課題の解決や持続可能な社会の実現に向け、地域を学び場とした地域課題解決型のキャリア教育の実践を通じて、自ら考え挑戦したり、多様な価値観を持つ人々と対話・協働したりしながら、地域への愛着を持って、地域に貢献し、地域の未来を切り拓くことのできる、地域に根ざした人材を育成することを目的とし、必要な資質・能力を育むためのカリキュラム開発に取り組んでいく。

<地域に根ざした人材に必要な資質・能力>

- ①地域に飛び出し、地域住民や職業人等、様々な立場の人々、世代を越えた人々の思いや考えを聴き取り共感しながら、コミュニケーションできる力【対話力】
- ②地域の伝統文化や産業、魅力等について調べたり体験したりすることを通じて、課題や改善点を把握・整理する力【追究力】
- ③自らの技術を磨き、他者とかかわり合いながら、仮説を立て、地域課題の解決に向けた取組や活動を創造する力【創造力】
- ④地域課題を解決するための具体的な提案や活動等を効果的に発信する力【発信力】

<カリキュラム開発の方向性>

- ①総合学科の柱に位置付けている3科目、「産業社会と人間（1年次必修科目）」、「キャリアデザイン（2年次学校設定科目）」、「いいなんゼミ（3年次総合的な探究の時間）」を再構築し、3年間の学びの連動の強化を図る。
- ②4系列（郷土・環境、介護福祉、コンピュータ、総合進学）の特色を活かした地域貢献のための学習活動の充実を図る。
- ③各教科・科目で地域の題材やデータを扱うなど教科横断的な学習を実施し、日常的な学びと地域・社会との連動を図る。

5 学校設定教科・科目の開設，教育課程の特例の活用の有無

- ・学校設定教科・科目 開設している ・ 開設していない
- ・教育課程の特例の活用 活用している ・ 活用していない

6 運営指導委員会の体制

氏名	所属・職	備考
西村 訓弘	三重大学地域イノベーション学研究科教授	学識経験者
浦崎 太郎	大正大学地域創生学部教授	学識経験者
吉仲 繁樹	三重県商工会連合会専務理事	産業界
橋本 純	三重県漁業士 三重県海水養魚協議会長	産業界
林 恵梨花	三重県大台町企画課主査	行政機関
岸川 政之	(一財) 未来の大人応援プロジェクト 代表	コーディネーター
土方 清裕	三重県立飯南高等学校長	校長代表
安田 恵理	三重県立鳥羽高等学校教諭	教員代表

7 高等学校と地域との協働によるコンソーシアム（地域人材育成コンソーシアム・いいなん）の体制

機関名	機関の代表者
三重県立飯南高等学校	土方 清裕（校長）
松阪市企画振興部	野呂 隆生（地域振興担当理事）
松阪市飯南地域振興局	榊原 典子（局長）
松阪市飯高地域振興局	村林 由美子（局長）
松阪市教育委員会	中田 雅喜（教育長）
松阪市西部教育事務所	北村 恭一（所長）
松阪市立飯南中学校	中村 元亮（校長）
松阪市立飯南高等学校	森井 義和（校長）
松阪市粥見自治住民協議会	中野 孝是（会長）
松阪市宮前まちづくり協議会	向坂 文一（事務局長）
株式会社三ツ知製作所	堀出 一（業務部部长兼生産管理課課長）
有限会社深緑茶房	松本 浩（茶長）
叶林業合名会社	堀内 楓子
有限会社上野屋	佐々木 幸太郎（代表取締役）
NPO法人 i sierra（アイシエラ）	太田 覚（理事長）
三重大学地域イノベーション学研究科	西村 訓弘（教授）
三重県立飯南高等学校・同窓会	高橋 克良（会長）
三重県立飯南高等学校・PTA	中村 誠（会長）

三重県教育委員会事務局教育政策課	大屋 慎一（課長）
三重県教育委員会事務局教育政策課	津村 尚美（主幹）

8 カリキュラム開発専門家，海外交流アドバイザー，地域協働学習支援員

分類	氏名	所属・職	雇用形態
カリキュラム開発等専門家	江森 真矢子	一般社団法人まなびと代表理事	都度謝礼にて対応
カリキュラム開発等専門家	浅野 吉英	まちげい KNOT 代表 豊岡短期大学非常勤講師	都度謝礼にて対応
海外交流アドバイザー	該当者なし		
地域協働学習実施支援員	横山 陽子	松阪市地域おこし協力隊	松阪市が契約
地域協働学習実施支援員	高杉 亮	松阪市地域おこし協力隊 Takasugi atelier 代表	松阪市が契約
地域協働学習実施支援員	飯島 宏枝	松阪市地域おこし協力隊	松阪市が契約

9 管理機関の取組・支援実績 (1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
学校長の懇談等、事業の進捗管理	適宜	16日 適宜	12日 適宜	1日 適宜	適宜	11日 16日 23日	26日 適宜	17日 24日 適宜	7日 20日 適宜	8日 10日 適宜	適宜	
管理機関の実施等による取組		5日 地域みらい留学		1日 地域みらい留学		高校生地域創造サミット		23日 26日 27日	運営指導委員会		7日	
コンソーシアム 飯南高校活性化協議会		第1回				第2回			第3回		第4回	

(2) 実績の説明

ア) 管理機関における事業の管理方法

- ・教育政策課の担当者と学校長で月平均1回以上は取組状況を共有するとともに、取組を推進していくうえでの諸課題の解決に向けて協議した。
- ・教育政策課の担当者が、生徒の活動発表や外部講師によるワークショップ等の学習活動を各学期に複数回見学し、成果や改善点等を学校長や研究主任等にフィードバックした。
- ・飯南高校活性化協議会を各学期に1回以上開催し、取組状況の報告を踏まえた協議を行った。

イ) 管理機関（コンソーシアムを含む）における主体的な取組について

- ・今年度は、飯南高校活性化協議会を4回開催し、活性化の状況について協議した。連携中学校である飯南中学校と飯南中学校からの進学者の割合は増加傾向にあり、中には飯南高校で探究活動を行いたいという思いを持って入学する生徒も現れるなど、飯南高校の学びが地域で浸透してきていることが伺われる。一方、これらの中学校でも今後、生徒の減少が見込まれることから、地域外からの入学者を増やすために地域と一緒にあってどのように取り組むかということについて話し合った。
- ・飯南高校活性化協議会と飯南高校学校運営協議会、地域人材育成コンソーシアム・いいな

んが主催して地域活性化セミナーを行い、地域で子どもたちを育てていくという気運がより醸成された。

- ・地域・教育魅力化プラットフォームが主催する地域みらい留学について、参画費を支援するとともに、オンラインで行われた「地域みらい留学フェスタ 2021」の助言を行った。数回にわたる学校紹介では、「いいなんゼミ」の取組、應援団 Circle の「空き家片付けプロジェクト」の活動など、生徒たちによる地域を学び場とした探究活動の説明がなされていた。
- ・昨年度は新型コロナウイルス感染症の影響により中止としたが、飯南・飯高地域を学び場とした「2021 高校生地域創造サミット」を改めて三重県教育委員会主催で開催した。この事業は県内の高校生を対象（64名参加）として、地域のことを主体的に考え行動する意欲や地域とともに課題解決に取り組む姿勢を育む機会として実施している。飯南・飯高地域の企業経営者等の“本気の大人”と出会うことで、地域の活性化について考え、地元松阪市に提言として取りまとめ提出した。飯南高校の生徒（8名参加）は、これまでの地域での探究活動を活かし、代表生徒や討議班のリーダーとなり活躍していた。開催にあたっては、コンソーシアムメンバーの企業や松阪市、松阪市飯南・飯高地域振興局から多大なる協力をいただいた。

10 研究開発の実績

(1) 実施日程

実施項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
「産業社会と人間」における地域等探究学習	1回	2回	3回				4回	3回	2回	3回	3回	
「キャリアデザイン」における地元や地域を知る活動およびプレいいなんゼミ	2回	2回	4回	3回	3回	2回	3回				2回	2回
「いいなんゼミ」における地域に関わる探究活動	4～12月の毎週月曜日1時限分、金曜日2時限分で、それぞれのゼミに分かれて探究活動を行った（在宅学習期間中はリモートによる進捗状況報告や、生徒個人の自宅活動を主とした）。7月に中間報告、12月に最終報告を行った。最終報告で内容が評価されて学年代表となった生徒8組は、2月10日の「いいなんゼミ発表会」に向けて活動内容を精査し、発表会当日は飯南産業文化センターにおいて成果発表を行った。											
学校設定科目「社会科学入門」での地域課題学習	2回	2回	5回			3回	3回	4回	1回	3回	4回	1回
授業改善のための教員研修				1回				1回				

※9月は緊急事態宣言下における在宅学習期間のため、当初の予定回数をみえ消しとした

(2) 実績の説明

ア) 研究開発の内容や地域課題研究の内容

本研究では、①総合学科の柱に位置付けている3科目の再構築、②4系列の特色を活かした地域貢献のための学習活動の充実、③探究的な学びを進める授業改善、の3つを柱として取り組んだ。

①における「産業社会と人間」（1年次総合学科必履修科目）では、実施から3年目となる地域へのフィールドワークをこれまでと比較構成しながら行った。今年度は初年度と同様

に行き先やグループを学期で変更して実施した。地域の方との交流は2年目と同様に、生徒自らが何う日時の約束を取る方法を取り、生徒が主体的選択のできる活動とした。3学期は自分が生活する地域や2度のフィールドワークで出向いた地域、あるいは自己の適性や在り方・生き方との比較を通じたかけ算プロジェクトを進めた。

「キャリアデザイン」（2年次学校設定科目）では、今年度も新型コロナウイルス感染症の影響で修学旅行等が中止となったため、計画内容は一部実施できなかった。ただし、昨年度から夏季休業中に実施している地域でのキャリアインターンシップは、37.3%の生徒が飯南・飯高地域での体験活動を行うことができた。12月には「高校生と地元企業の交流会」を連携中学校2年生も招いて実施し、本気の大人講演会は2度開催して、地域での仕事ややりがい、生き様等について知る機会とした。また、例年3学期から開始するプレいいなんゼミは4月からスタートさせ、自ら問いを立てることを意識した取組を年度当初より実施した。

「いいなんゼミ」（3年次総合的な探究の時間）では、昨年度のように生徒と校外の大人とを積極的に繋げ、生徒の興味・関心に基づいた活動をサポートした。そして Google Classroom を用いた校内共有や、Zoom を使用したオンラインでの意見交換も行った。

②については、今年度もコロナ禍で校外での長期実習を自粛せざるを得ない中、介護福祉系列では専門家からの福祉実技指導や実習施設見学、また地元企業との看板プロジェクトを行った。郷土・環境系列では、地域の花壇の共同管理を通して地域活性化やホスピタリティについて考え、今年度は所有者から播種作業も任された。コンピュータ系列では夏季休業中に小学生対象のプログラミング教室で指導を担当した。総合進学系列では、一昨年度からの地域を軸にした高大連携授業を一層進め、学んだ内容について地域の方とのトークフォークダンスによる対話を行って深めていった。

③については、7月に神奈川県相洋中学・高等学校の斉藤友昭教諭とオンラインで繋ぎ、生徒の対話を促す授業とICT活用について学び、11月には大正大学地域創生学部の浦崎太郎教授と本校卒業生の地域創生学部2年平野彩音さんによる活動報告会を聞き、本校の教育活動を改めて内省した。また、公開授業週間を利用して授業デザインや授業目的、ICT活用等について相互共有し、探究的な学びを進めるに当たっての授業改善を検討した。その中で、生徒の学びを広げ深めるため、県内外の高校生との意見交流も実施し参考とした。

イ) 地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け

先述の「産業社会と人間」、「キャリアデザイン」、「いいなんゼミ」は、本校総合学科の柱に位置付けている3科目であり、この連動を強化しながら3年間を通じた地域課題解決型キャリア教育の充実を図った。特に、1年次のフィールドワークで地域を知り、他地域や自分自身と重ね合わせながら、自己の在り方・生き方を考えられるようにした。そして、2年次以降の各系列の授業科目で特色を活かした学習活動を展開し、地域を学び場とする連続性をもたせた。3年次には、1, 2年次で見聞きを重ねて感じたり疑問を持ったりしたテーマを、自分自身の興味関心や進路等に繋げながら、いいなんゼミにおいて学びを深めていけるようにした。

ウ) 地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に関連させ、教科等横断的な学習とする取組

「産業社会と人間」でフィールドワークを行い、1年次から地域を学び場としたことで、生徒は地域を自分ごととして捉えられるようになった。そして、2年次の系列科目において地域を軸にした授業での学びを進め、地域に自分軸を置いた活動が少しずつできるようになり、そのことを踏まえていいなんゼミにおいて地域活動を実施する生徒が出てきた。

エ) 地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制

一昨年度に設置した「地域協働カリキュラム推進委員会」では、今年度は本校教員、カリキュラム開発専門家、地域協働学習実施支援員の計 15 名で全体企画や指導内容を検討した。今年度は 10 回と昨年度より委員会を多く開催し、「産業社会と人間」におけるフィールドワークの改善提案や、「キャリアデザイン」でのいいなんゼミに向けたテーマ設定の方法等について協議を行った。昨年同様に委員会の下部組織として作業部会を設置し、細部での検討が必要な場合には作業部会で協議を行った。

オ) 学校全体の研究開発体制（教師の役割、それを支援する体制）

「産業社会と人間」、「キャリアデザイン」、「いいなんゼミ」は該当学年を中心に学習活動の素案を作り、必要がある場合に作業部会で精査する流れを作った。企業との連携については進路指導部を中心に対応した。そして、地域協働カリキュラム推進委員会での協議内容は職員会議で報告し、校内教員への情報共有を図った。

系列での学習活動については、系列に関係する教員で実施内容を考え、地域との関係性を構築した。また、授業改善に関する研修会は本事業研究担当教員兼教務主任が受け持ち、管理職と共同して人選・連絡を行った。

カ) カリキュラム開発等専門家、地域協働学習実施支援員の学校内における位置付け

カリキュラム開発等専門家は、助言者として地域人材育成コンソーシアム・いいなんおよび地域協働カリキュラム推進委員会に参加し、他地域の事例の紹介や本校のこれまでの実践事例を比較しながらアドバイスをを行った。今年度もコロナ禍のため、昨年度同様に基本的にオンラインで協議へ参加した。

地域協働学習実施支援員は、松阪市が雇用した松阪市地域おこし協力隊が担っている。今年度 10 月から 3 名配置となり、それぞれの得意分野を中心に教員や生徒と関わっている。今年度も週 1 回程度の打合せを行っており、特にフィールドワークや「いいなんゼミ」において欠かせない伴走役として活動し、さらに地域の大人とのパイプラインともなっている。

キ) 学校長の下で、研究開発の進捗管理を行い、定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ、計画・方法を改善していく仕組み

地域協働カリキュラム推進委員会や作業部会において生徒の活動の様子や振り返りを共有し、反省点を協議して次年度への改善検討を行っている。さらにコンソーシアム会議や活性化協議会、学校運営協議会でも情報共有をし、地域の関係者にも助言・評価をいただいている。また、年 1 回の外部アンケートや学期ごとの生徒アンケートを実施して、その数値を集約・共有している。

ク) カリキュラム開発に対するコンソーシアムにおける取組

フィールドワークでは活動受け入れや地域で話を聞くことができる大人の人選、生徒輸送バスの運行等を行った。また、看板プロジェクトでの生徒との協働、本気の大人講演会の講師紹介、「キャリアデザイン」における地元企業へのキャリアインターンシップの受け入れ先の提供にも関わった。さらに「いいなんゼミ」においては、生徒の伴走者として指導・助言も行った。

ケ) 運営指導委員会等、取組に対する指導助言等に関する専門家からの支援

運営指導委員会の活動日程・活動内容は以下の通りである。

活動日程	活動内容
令和3年12月23日 (第1回)	・今年度の各校の活動について報告・共有 ・「地域課題解決型キャリア教育の手引き」について
令和4年3月7日 (第2回)	・「地域課題解決型キャリア教育の手引き」について ・3年間のまとめ

コ) 類型毎の趣旨に応じた取組

1年次の「産業社会と人間」でフィールドワークを実施し、地域を学び場にした学習活動によって地域の自分ごと化が進んだ。このことで地域を具体的にイメージすることができ、2年次の系列授業での学習活動でデータ活用や内容を取り上げる際、生徒の理解が一層深まった。1, 2年次に授業時間内や放課後等に地域の大人と交流を持てたことで、今年度は3年次の「いいなんゼミ」において、生徒と地域の大人とが日常的に意見交換をする機会が増えた。地域の大人に伴走者となっていただいたことで、これまで教員だけでは指導できなかった部分に専門的見地からの意見が加わって、生徒の学ぶ意欲が高まり、成長が促進された。

サ) 成果の普及方法・実績

今年度の第1回フィールドワークで作成した魅力マップは、夏休みに道の駅茶倉駅の一室を借りて一般にも観覧できるように展示を行った。アンケートには、「地元でも知らないことがあった」や「このマップはもらえないか」などの意見があり、生徒が発信力を鍛える場としてだけでなく、生徒の学びが地域の良さを再認識できる場としても機能したと言える。そして連携中学校の文化祭でも展示し、中学生や保護者に対しても高校の取組を伝えることのできる絶好の機会となった。そのため、「飯南高校に進学して地域の探究活動に取り組んでいきたい」と意欲を語る生徒も出てきた。

キャリアインターンシップ発表会や第2回フィールドワーク発表会には、昨年同様に当日関わっていただいた地元企業や地域の方等にも来ていただき、活動内容の還流報告を行った。「いいなんゼミ」については、今年度もオンラインと対面とのハイブリッド開催とし、オンライン視聴のため、コンソーシアムの関係者や地域住民、県内外高校や連携中学校、近隣小中学校にも案内を送付した。それらの活動や「いいなんゼミ」での探究活動、部活動・サークル活動など学校に関する報道については、今年度は数社の新聞や行政チャンネル「アイウエーブまつさか」など、各メディアによって70回程度取り上げられた。

また、『地域人』第70,71号や『季刊教育法』No.209、『キャリアガイダンス』vol.440にも本事業の取組や生徒の活動の様子が掲載され、全国的にも成果を普及する機会を得た。そして、「大正大学高大接続フォーラム」と「飯南高校と共に未来を拓く地域活性化セミナー」では、本校教員の他に現在大学に在籍する本校卒業生の活動報告も行われ、高校卒業後も自走し続けるモデルケースを紹介するに至った。さらに、昨年度のように市内の嬉野中学校での講演や、三重県小中校長会での研修会講演、三重大学やユマニテク短期大学主催の学会大会やフォーラムにて本校校長が実践報告を行うなど多種にわたる成果報告を行い、生徒が成長した姿や本校の教育課程について他地域へも波及することができた。

1.1 目標の進捗状況、成果、評価

「産業社会と人間」のフィールドワークは、9月の在宅学習期間の影響で10月に事前学習時間が十分に取れず、さらに活動先も変更したため、調べ学習から深められずに終わるグループが出てしまった。そして「課題を考える」に軸を置きすぎてしまうと、マイナスイメージが先行してしまい、活動内容を他人ごととする生徒がみられた。地域のことを自分ごとにし、自己

の在り方・生き方を考えていく学びを進めるためには、事前学習の時間確保や2回のフィールドワークを同じ地域を深める活動とすること、今あるものからより良いものを考えていくという視点を大事にすることが必要だと感じた。しかし、その活動の中で、「地域の方に話を聞いていると自分と価値観の違った話が聞ける」や「活動を積極的に進めることでコミュニケーションを取る力が付いた」という生徒の声があり、成長の実感を伴ったものになったと言える。また、地域の方々から声をかけていただいたり、新たな連携が生まれるきっかけになったりと、地域を学び場とした学習活動の意味を再確認できた。今後は3年間の反省を踏まえてより良い年間設計になると確信している。

「キャリアデザイン」は1単位の活動であるが、3学期の活動時間が例年より少ないことを踏まえて、例年実施しているプレいいなんゼミを4、5月で実施した。プレいいなんゼミは3年次いいなんゼミへの接続を考えた事前活動に位置付けているが、1年次で行ったかけ算プロジェクトからの連続性を考えて計画した。2年次の当初から問いを立てて考える活動は全員がうまく実施できたわけではないが、自己の在り方・生き方や進路を考えた活動に広げられる生徒もいた。ここで問いを立てる活動を実施したことで、通常授業においても「なぜ」、「どうして」を持つきっかけとすることができた。そのため、夏休み期間中に実施したキャリアインターンシップにおいては、「なぜこの仕事をしているのか」、「どういうところが生活していて楽しいのか」といった内容を実習先で質問し、発表会では、自らの進路選択や自分らしく生きるとは何なのかという問いを自分自身に重ねられる生徒がみられた。その思考を踏まえながら12月には企業説明会が実施されたため、年間の流れも以前よりはスムーズになったと言える。

今年度のキャリア開発の重点である「いいなんゼミ」では、地域の大人と関わって活動する生徒が多数みられた。地元で林業を行う若手団体と木工キットを共同作成して地元小学校へ寄贈する活動や、天文台施設の関係者と観望会を共同開催する生徒が登場した。また、オンラインで校外の大人と積極的に繋がり、そこでイベント開催に向けて意見交換を行いながら、魅力的な地域を知ってもらい交流人口を増加させる目的でハイキングイベントを企画する生徒も出てきた。このイベントを企画した生徒は、「中学校の時は地元が好きとは言えなかったけど、今は自信を持って言える」と言い、3年間地域で活動をしながら校外の大人の伴走者と関わることで、地域をより良くしていこうと自走していく生徒の好例となった。そしてこの自走する様子を見て教員の生徒観が変化してきており、入学当初は自分に自信が持てなかった生徒であっても、地域を学び場として自己の在り方・生き方を考えながら、自分らしく社会に飛び込んで活動することで大きな成長に繋がることが、校内にも実感として広がってきた。

系列における学びはコロナ禍や人事異動により当初の計画とは実施内容が変わったものの、生徒の学びの状況に応じて活動を行うことができた。郷土・環境系列では、学校周辺の地域花壇の共同管理や福祉施設への花植え交流を通して、花卉の知識を深めながら地域への貢献活動を実施した。介護福祉系列では今年度も継続的に実習先へ行くことは叶わなかったが、昨年度からの地域包括支援センターと連携した学びを深めたり、OB・OGとの関係もあって福祉施設見学実習を実施したりした。総合進学系列では高大連携授業の学びを深め、地域を軸とした学びに自分の興味・関心を接続して考える活動を行った。その結果、「地元の方と対話しながら実際にそうなのかを考えたい」との声が上がり、トークフォークダンスを開催して実社会と学問との学びの連動も起こすことができた。コンピュータ系列では、一昨年度作成のイメージキャラクターを用いたグッズ製作づくりを続け、自分たちが高めてきたスキルを用いてプログラミング体験教室の教師役として地域の小学生に対して指導を行った。これまで活動してきた

ことを継続・深化させながら、学びの成果を地域へ還元していく形も起こってきた。これらの1年次フィールドワークの体験からの連動した学びや2年間で深めてきた系列の学びは、先述した「いいなんゼミ」にも繋がっていった。このように生徒の学びが多様になると、地域を軸としながら自然と教科横断的になる結果にも繋がり、それを通じて生徒が成長していくことができた。

今年度の授業改善研修会は、昨年度のようにオンラインで実施し、授業デザインや対話的な授業について内容を深めた。その内容を踏まえて授業での回答やアンケートをオンラインで実施し、それをGoogleドライブやICT機器を用いて生徒に学びのフィードバックを行う事例も出てきた。ICTについては昨年度末に通常教室で環境が整備され、それを日常的に使用しながら生徒のアウトプットの時間を創り出す授業もあった。また、浦崎太郎教授の研修では、「課題発見や課題解決は自分らしさを活かす手段である」や「生徒に自分らしさを表現させることの大切さを改めて気づけた」などの感想が出て、これまでの本校の教育活動の価値を再定義していただきながら、自分らしく生きるための学びへと繋げる意識が共有できた。これまで授業改善研修と銘打つものは校内でなかったが、この3年間で生徒の成長を促すために実践を重ねてきた全国の先生方と何度も交流することができ、これをきっかけに授業をより良いものにするべく工夫・改善をし、校内でその実践が少しずつ共有される雰囲気が出たことは、とても大きな一歩であった。

本事業の成果目標は、3年生において1年次1学期から3年次2学期までの学期ごと計8回をアンケートによって集計した。「対話力・追究力・創造力・発信力の4つの能力がすべて身に付いたと考える生徒の割合(%)」については、29.3→37.3→49.3→41.7→46.8→92.9→64.1→64.0と、3年間で2倍以上も上昇した。各項目も1年次1学期と3年次2学期を比較すると、対話力58.2→85.3、追究力59.5→90.7、創造力65.8→78.7、発信力41.3→84.0と飛躍的に上昇した。自らの問いに対して探究サイクルを繰り返し、プレゼンテーションを年間で何度も行うため、特に追究力と発信力が著しく向上したものと考えられる。

一方、「松阪市及びその周辺地域出身の就職希望者のうち、松阪市内及びその周辺地域の事業所等に就職した割合(%)」は75.8→72.2→80.0、また「松阪市及びその周辺地域出身の就職希望者のうち、飯南・飯高地域の事業所等に就職した生徒の人数」については7→3→8となり、今年度は回復傾向が見られた。いずれも目標値には到達しなかったが、地域人材育成コンソーシアム・いいなんに所属する企業やフィールドワークで協力いただいた関係先への就職があり、1年次から地域を学び場とした意味は、就職の面においても少なからず成果が出たのではないかと感じる。

<添付資料> 目標設定シート

1.2 次年度以降の課題及び改善点

(1) 学校からみた研究開発にかかる課題や改善点について

本校生徒が地域に飛び出すきっかけであり、3年間継続実施してきた1年次「産業社会と人間」における年2回のフィールドワークは、校内だけでなく地域でも根付いた活動になってきている。校内教員で理解も進んできたが、生徒の様子やコロナの状況もあって、3年とも内容を修正しながら異なる形で実施した。そのことによって自己の在り方・生き方から学びを考えていくという視点がずれてしまうこともあり、生徒の学びが上手く進まなかった点や、地域課題を考えすぎるあまり自分ごとに落とし込めない生徒も出てきた。そのような課

題や3年間実施して見えてきた良い部分を洗い出して、次年度プログラムを組んでいきたい。そのためには先述したように、事前学習の時間確保や同じ地域を深める活動、今あるものからより良いものを考えていく視点を大事にすることを、生徒や教員が共通理解する必要がある。

そして、地域課題を解決することが主となるのではなく、育てたい生徒像を地域と学校とが共有して学びを進めていく必要がある。来年度からは予算確保という課題は出てくるが、自ら当事者意識を持ち自走できる生徒を地域とともに育てていくために、どのような生徒を育てるのか地域と共通言語をもって連携して取り組んでいきたい。

(2) 管理機関からみた課題及び改善点について

ア) 本事業に関する課題や改善点について

地域と協働して活発に探究活動を行っているが、今の段階では学校が主体となっている活動が多く、管理職や教職員の構成が変わると今の学びを続けていくことが難しくなる可能性も考えられる。より地域が主体的に関わり、教職員の誰が担当となっても学びが続いていくような体制を作る必要がある。令和3年度より飯南高校はコミュニティ・スクールになり、産官学が協働し、地域を学び場とした活動をより推進していくことができるようになった。学校運営協議会を設置したことで、学校の活性化について協議し、地域がより主体的となって学校へ関わることが期待できる。

また、県内の小規模校が取り組んできた地域を学び場とした課題解決型学習の成果について、「地域課題解決型キャリア教育モデル」として整理し、他の学校においても生徒が地域の方々や職業人など多様な人々と関わりながら、地域の産業や行政と協力し、地域活性化や課題解決に取り組む学習活動が拡充できることをめざしており、飯南高校で行ってきた学びについても活用したいと考えている。

イ) 自走に向けた方向性について

事業終了後の自走を見据えた取組については、オンラインを利用した活動が進んだことから、引き続きオンラインを有効に活用した学習活動を続けていくことが考えられる。

また、令和3年度からコミュニティ・スクールとなったことで、小学校からの地域での探究活動が緩やかにつながることとなった。今後は、学校運営協議会を中心に活性化について協議し続けていくこととなる。さらに、松阪市総合計画（令和2年～令和5年）では、主な取組内容として「地域と協力して県立飯南高等学校の魅力化に取り組み、地域を担う人材の育成を支援します」と記述されており、松阪市からの支援も期待される。

【担当者】

担当課	教育政策課	TEL	059-224-2951
氏名	津村 尚美	FAX	059-224-2319
職名	主幹	e-mail	kyosei@pref.mie.lg.jp